

第八章 人の一生

第一節 婚礼

1 婚約の前段階

名古屋の婚礼

「嫁をもらうなら名古屋から」とか「名古屋へは嫁に出すな」、あるいは「娘三人持てば屋根棟落ちる」という口碑がある。これらは、名古屋では嫁入り仕度に相当の費用をかけねばならず、里方（この地方では一般に在所と称される）の負担が大きかったことを表している。「名古屋の結婚式」は、とかく「派手」であると喧伝されてきた。ここでは、「結婚式」が派手であるかどうかの判断基準の一つとして、結納品や婚礼道具の多さが取りざたされる。現在でも、東京や大阪に比べ、名古屋の婚礼で用意される家財の多さは、よく指摘されるところである。婚姻儀礼は年代や階層による差が著しく、かつての名古屋の結婚式があまねく派手であったなどとは言えないが、派手に流れやすい要素があったことは認められる。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

1 婚約の前段階

恋愛と交際

太平洋戦争前の場合、若い男女が結婚に至るきっかけは圧倒的に見合いであり、農村部では、「親が決めてしまった」という結婚も多かった。しかし、庶民の場合、ずっと以前は恋愛による結婚も多かったのである。恋愛が成立するための習慣として、農村部ではムスメアソビ（娘遊び）があり、これが元で結婚に至ることもあった。

娘遊びは、十六、七歳から兵隊検査くらいまでの若い衆が、夜、何人かのグループで娘の家などを訪れ、ここで茶飲み話などをしてくるもので、ヨアソビ（夜遊び）とも言った。若い衆のグループは特別に組織されたものではなく、たとえば、青年団の中の有志で出かけていった。初めは勇気がなくて出かけられないので、兄若い衆（先輩）が誘ったり、「きれいな娘がいるで世話をしてくれ」と頼んで連れて行ってもらう場合が多く、その後、だんだんと同級生だけで行動するようになっていった。戦前の西区比良では、十五歳から二十五歳までの若者が地区の北と南に分かれて若衆宿に集まったが、この中の三つくらいの年の差の者同士が、「三年友だち」というグループを作っていた。これは生きている間はツキアイをするという仲間で、娘遊びにも一緒に出かけたという。

娘遊びに行くのは夕食後で、一〇時くらいには帰ってきた。歩きか、せいぜい自転車に乗ってゆくため、出かける範囲は一里四方くらいである。新しい出会いを求めるため、自分のムラの娘のところよりも、ヨソムラに行くことの方が多かったという。

娘遊びは、娘の個人の家を訪れる場合と、刺繡屋や絞りの蜘蛛屋など、一カ所に恒常的に娘が集まって夜なべ仕事をしている場所を訪れる場合があった。娘遊びには季節はなく、「雷が鳴っても雪が降っても出かけた」という人もあるし、一方で、「寒いときは娘遊びには行かなかった」という人もある。しかし、基本的には農閑期に娘が夜なべ仕事をしているところに出かけて行くことが多く、個人の家を訪れる場合は、娘側の生産層に規定されることになった。一方、一カ所に恒常的に娘が集まっている場所を訪れる場合は、若者側の都合で季節が選ばれる傾向があった。

北部の平坦部から東部丘陵地区では、個人の家に出かける場合がほとんどであった。守山区川村では、娘遊びに行くのは、天王祭りや盆踊りなどの行事のあった夏季の他、縄ない、お針などの夜なべ仕事があった秋から冬が多かったという。名東区高針でも、取り入れ後の秋から冬の夜なべの頃、若い衆が盛んに娘遊びに来た。個人の家を初めて訪れるときは、そこの家の人に了解を取らなくてはならなかった。中には断る家もあったが、認めた場合は、若い衆が「こんばんは」といってやって来ると、親は寝てしまったり、隠れてしまったりしていた。高針では、秋ならば土臼での朶摺り、唐箕やカナ（千石筵）での選別、俵詰めなどの夜なべ仕事をしているので、娘遊びに来た若い衆はその手伝いをした。頃合の時間になると娘の家ではオハギなどを用意してくれ、これは労働力を提供する代わりでもあった。大正初期には、若者が手伝いで朝までいる場合もあったといい、娘のいる家では、手間（労働力）が多くなったものであるという。高針はいくつかのシマに分かれていたため、ムラの中でも行き来は盛んであり、娘遊びでいっしょになる人もいた。

市域西南部では、金糸や銀糸で仏壇の布や着物の縫い取りをしたり、ハンカチや半襟に刺繡をしたりする、刺繡屋、ハンカチ屋、縫い屋とよばれる業者が多く、ここに娘が集まって夜なべをしていた。これらは、娘に技術を教えるとともに製品を売っているところで、娘は就職を兼ねて縫い物の稽古をしていた。個人の家では遊べるところとそうでないところがあるので、個人宅よりも刺繡屋を訪れた方が効率良かったという。娘はいつでも集まっているので、娘遊びの季節は若者側の事情によって決まった。中川区戸田では、娘遊びによく行った季節は、比較的農事が暇な一〇月の取り入れ前であったという。中川区下之一色では、漁師は夜の仕事が多かったため、悪天候や休日の昼間などに遊びに行ったという。刺繡屋でも堅いところでは遊ばせてくれなかったが、娘たちも若い衆が来るのを楽しみにしていたので、若い衆の訪問を禁じた刺繡屋は娘たちに人気がなく、娘が集まらなかった。もっとも、稽古中はろくに話もできず、横着な若者は師匠に追い出されることもあり、娘の顔を覚えられないこともあったという。

市域東南部では、有松絞りの内職が盛んで、たくさんの娘が従事していた。緑区有松では、絞りの括り作業は蜘蛛屋の仕事場でおこなわれ、娘が一〇人くらい集まっては手内職をしていた。ここに若い衆が大勢遊びに来て、仕事場の方でも黙って中に入れていたという。緑区大高でも、ほとんどの娘が括りの内職をしていて、夜になると友達同士四、五人くらいが一軒の家に集まり、話をしながら作業をしていた。若い衆は、こういう家に毎晩のように遊びに来て話をしていた。

特定の相手ができるまでは、一晩のうちに何軒も娘遊びに訪れた。二、三人で行った場合でも、娘と仲良くなった者ができればそこに残しておき、その間によそに行った。慣れると一人で行くようになり、好きな男であれば、娘の方でも心待ちにしていた。一方、特定の娘ができてから他の家をハシゴするとすぐにばれてしまい、次からは断られることになった。そういうことは昔は堅かったという。

娘遊びに行くと、他の若い衆に嫌がらせをされ、娘のところにいる間に自転車のタイヤの空気を抜かれたり、自転車が川の中に放り込まれていることもあった。また、よそから来る若い衆に対し、オワイのタメツボ（溜壺）に縄を入れてクソナワ（糞縄）にし、これを張っておいたり、縄で足をひっかけさせたりしたこともあったという。娘のところで嫌われたり相手にされなかったりしたときは、腹いせに娘の家の外にクソナワを張って親を困らせることもあった。娘が風呂に入っているときに行き、着物を持ってきたりという悪さをする者もいたという。いつの時代も、若者が集まると無軌道ぶりが発揮され、途中では柿をちぎったり、スイカを盗ったりという悪さもしていた。

「夜遊びでは、お互いに品定めをしていた」といい、「若い衆が遊びに来ないようにところはろくなところでない」ともいう。大正初期生まれの人たちからは、「親の世代では、じきによくなってしまっただけがもとで結婚することもあり、子どもをでかして帰ってくることもあった」ということが語られ、おそらく明治の頃までは、娘遊びは正当な配偶者選びの手段の一つと考えられていたのであろう。しかし、時代が下がれば、「夜遊びは遊び」とか「娘遊びは時間つぶしの娯楽」という人が増え、娘遊びが結婚にまでつながるという意識はなくなってゆく。この習慣がいつまであったかは定かではなく、一部に「戦後も少しやっていた」という地区もあるが、ほとんどは戦時体制の下で消滅したと思われる。

ところで、娘の了解なしで訪れるヨバイは、「夜遊びとは違い、盗人のようなものである」と言われて区別される。「昔は、夜に娘は外に出してはもらえず、女が夜道を歩いてはいけないといていた」という話者も多く、娘遊びがルーズな男女関係を認めるものでなかったことは確認しておきたい。

町場では、娘遊びのような習慣はなかった。ある程度の商家であれば、互いの家の商売のこともあり、釣り合う相手をうまく見つけることは難しかったので、相手を世話してくれる仲人を利用する場合がほとんどであった。当時の下町の一般庶民の場合、恋愛結婚もかなり多かったことは現在と変わりがないであろう。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

1 婚約の前段階

仲人

恋愛によらない結婚の場合、配偶者を紹介する仲介者・仲人が必要となる。名古屋市域では、仲人のことはオチュウニンと称することが多く、配偶者選択の仲介の他、婚姻儀礼の取り回し、婚姻後の夫婦の相談に乗ることなどが役回りとして期待された。この役回りは一人ですべて担う場合も、複数の者で分担することもある。

市域西部では、仲介者がそのまま婚姻儀礼の取り回しをすることが多かったようである。各ムラにはオチュウニンを好きでやっていた人があり、顔が広く、どこにどういう娘がいるかをよく知っていた。女の人が多く、オチュウニン屋さんとかオチュウニンババサと言われた。写真を持ってきては話を勧め、両家の間を行ったり来たりして最後まで面倒をみてくれ、式の際は夫婦で列席して取り回しをした。仲人は、シンセキまわりの人に頼むよりも、こういうセケン（世間、外部）の人に頼むことが多かったという。

市域東部では、仲介者を介さずにシンセキまわりで結婚相手を見つけ、初めからおじさんなどをオチュウニンにすることが多かったようである。話を持ってきたオチュウニン屋さんにそのまま式の取り回しまで依頼することもあったが、たいていは、仲介者があった場合でも、式の際はシンセキまわりの人や、シマの顔役などの有力者を頼み、これをオタノミチュウニン、タノマレナコウドなどと呼んだ。

オチュウニン屋さんが仲人を務める場合は、これは婿方、嫁方のいずれが立てたものという区別はない。初めからシンセキなどに頼む場合は、双方で相談はするが、たいていは婿方のおじさんなどが引き受けていた。一方、三河から尾張東部にかけては、仲人を婿方嫁方の双方から立てる両仲人のしきたりがあるが、名東区引山など市域東部でも、双方から立てる場合があった。また、婿方から男の人、嫁方から女の人をオチュウニンに立てることもあったという。

話をまとめてくれたオチュウニンには、三年間は盆暮れに挨拶をした。市域東部では、暮れの挨拶にはたいていゴンボ（ゴボウ）を持っていった。このゴンボは太さが三～五センチメートルくらいあり、縁起がいいものとされ、五本くらい束にして八百屋で売っていた。シンセキがオチュウニンを務めた場合は、そのツキアイ期間も当然長期にわたった。また、初の子どもが産まれた場合は、オチュウニンから産着などのお祝いが贈られるのが一般的であった。

町場でも商売で仲人をする人がいたので、婿がほしい、嫁がほしいという人はここに写真などを預けておいた。よさそうな人がいれば写真を携えて話を持ってくるので、見て気に入れば相手の家の近所で聞き合わせをし、それでよければ見合いの場所を設定した。話をまとめた仲人では家柄などに不足がある場合、これとは別に婚礼用に仲人を立てた。シンセキや商売上の取引関係の人、経済的に豊かな懇意な人などに頼み、形式は決まっていなかった。暮盤割の大店などは、シンセキ同士で結婚相手を相談し、式の際は有識者に仲人を依頼することが多かった。商家の店員の場合は、別家にあわせて主人が結婚相手を世話してくれる場合もあり、主人が親代わりとなって仲人も引き受けることがあった。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

1 婚約の前段階

好かれる相手と聞き合わせ

結婚相手としては、よく働いて丈夫な人、まじめで気だてがよく、おとなしい人が好まれた。また、男の人であれば大酒を飲まない人、女の人であれば、器用でお針の上手な人などが条件となった。いいところで女中奉公していた娘は「しっかり仕込まれているで嫁にいいぞ」といい、縁が早かったという。かつては、結婚相手個人よりも、むしろ相手の家との釣り合いが問題であった。「釣り合わないのは不縁のもと」といい、家柄が同じくらいでないとなればツキアイの際の軋轢からうまくいかなかったため、仲人もだいたいい家柄の釣り合うようなところを紹介した。

昭和初期の結婚の適齢期は女性が二十～二十三歳、男性は二十五、六歳であった。また、夫の方が年上である場合がほとんどで、姉さん女房はあまりいなかった。

昭和初期くらいまでの通婚圏は二、三里であり、その中で、相手のムラの生業の形態が似通っているところが選ばれた。たとえば、中川区戸田では、同じような水田を作る「百姓屋」から嫁にもらうとよく働くので、飛島村など下の方（南）との結婚が多かった。上の方（北）は畑が多いため、米作り専門の戸田に来ては役にたたず、嫁をもらうことは少なかったという。また、名古屋の町場との通婚もまれであった。一方、中川区下之一色の漁師の家では、農家から嫁をもらうことはまれで、たいていはムラの中の漁師か魚屋の家と結ばれたという。このような条件が、ムラによっては嫁をもらうのによい方角として語られることもある。たとえば、西区比良では、東の楠・如意（北区）、豊場・青山（豊山町）などから嫁をもらおうとよいと言っていたが、単なる迷信というよりも、何らかの社会的・経済的理由が背後にはあったのだろう。

相手の家の近所に、その人の評判や病気の有無などを調べにゆく聞き合わせは、かつては盛んにおこなわれていた。聞き合わせで大切なのはスジのことで、ハンセン病の人がシンセキにいないかということに気をしたということであった。この病気に対する差別意識と遺伝病であるという事実誤認によるもので、中には人権を侵害する行為があったのも事実である。聞き合わせには、親兄弟のうち女性が多く出かけた。店があれば買い物ついでに何となく聞くのが聞きやすかったが、中には手拭いなどを持ってきて近所の家を訪れる人もいた。実際には、聞かれた方も悪口を言ったら駄目なので、当たり前障りのないことを言うようにしたものという。

結婚相手を決めるときは八卦見にみてもらうこともあり、天白区八事の大学院や中村区の藤の棚、南区の丹八山などに出かけた。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

1 婚約の前段階

見合い

かつての農村部では、聞き合わせをしてこれでいいとなってから見合いをしたため、見合いの前には八割方は話ができていた。したがって、見合いはきわめて形式的な最終確認のようなものであり、多くの場合、これがきっかけで交際が始まるというようなものではなかった。オチュウニンからの結婚話は親に初めにもたらされ、親は相手の家柄を考え、次に結婚相手のことを考えて、気に入れば「見てきてみよ」といって息子に見合いさせた。娘の方でも、ほとんど親が相手を決めてしまってから「こういう話があるがどうだ」と持ちかけたのであり、本人の選択の余地はあまりなかった。お茶を出してくれといわれ、男の人二人のところにお茶を持っていったところ、親が勝手に結婚の話を進めていて、それが後の夫であったという話者もある。

見合いは娘の家でおこなうことが多く、若者とオチュウニンの二人で訪れた。娘の方では父親が応対に出てきて、場合によっては母親もいることがあった。途中、娘がお茶を出しに来るが、姉妹の多い家での見合いなどでは、事前にオチュウニンが「お茶を持ってきた人が見合いの相手だで」と言っておいた。また、「娘が気にいったらお茶のお代わりをしろ」とも言われた。若者と娘が特に言葉を交わすことはなく、お茶出しの時にちらっと顔を見るだけであり、まさに「見合い」であった。

昭和初期の町場の場合、見合いの場所には料理店が使われたり、芝居を見に行つて、幕間に相手を見るということもあったという。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

2 結納から荷送りまで

結納

結納から荷送りまでは、名古屋地方の婚姻儀礼の中でも、もっとも派手であると喧伝されている部分である。結納は婚約の証拠となるものであり、この後は、娘方からの破談の場合は結納金の「倍返し」、若者方からの破談の場合は結納金を放棄するものとされ、簡単に破談にはできなかった。結納を持参するのは、オチュウニンと婿の父親というところが多いが、中川区下之一色のように、「仲人と婿、女親の三人で出かけ、男親は行かなかった」「女の仲人が一人でやってきた」「姉と兄嫁が持参した」など、女性が深く関与するところもあった。結納のしきたりも、農村部では市域の東部と西部で多少の差があり、西部では、結納に際しての土産や結納返しのごことがよく語られ、東部に比して派手な印象がある。しかし、太平洋戦争以前は、概して結納は簡略であり、地域差よりも階層差の方が大きかった。町場では結納店によって早くから形式が定められ、戦後はこれが農村部にも浸透し、市域内での地域差はうすれてゆく。

戦前の結納では、普通はスルメ（寿留女）、昆布（子生婦）、シラガ（友白髪）にお金（小袖料）をつければよかったという話者が多く、「祝儀袋にお金だけを入れて持っていた」という場合もあった。結納金の基準は「笹筒一釣り分」などともいったが、実際の金額や結納品の数などは、家によってまちまちであった。鯛や宝船などの呉服細工は、羽二重や縮緬の布でできたもので、ほどいて帯締めなどを作ったが、戦前の農村部の結納では、ここまで持参するのはまれで、結納品が充実してゆくのは戦後のことであった。結納に際し、先祖、父、母、兄弟のお土産を持参するしきたりも、戦前の農村部ではすべての家がおこなったものでなく、「堅い家」に限られたものだったという。また、いわゆる結納返し（引出結納）として、結納の返礼に結納時の紅白の水引を緑白に変え、同じような品を嫁入りの荷物とともに持参することも、元はまれだったようである。これらも結納の定型化によって浸透していったものであろう。

結納は、大安、先勝、友引などの日を選んで持参した。季節についてはこだわりがなく、結婚の半年くらい前におこなう場合が多かった。結納の品は半長持に入れ、唐草模様の風呂敷で包み、仲人が背負っていった。

西区比良では、結納に行くのは婿の父親とオチュウニン（夫婦または男の人）であり、結婚する当人は行かなかった。結納を持っていったときは縁側から入る。玄関は「出入り」をすところなので、また出てゆくということを嫌ったものという。結納飾りは床の間に並べるが、この間、受ける方は座を外していた。用意ができると声を掛け、「今日はお日柄もよろしく、ご両家の婚約がめでたく調いました」という口上を述べ、嫁方では「謹んでお受けいたします」と挨拶した。また、結納とともに父母、兄弟、ご先祖などへのお土産（先祖は線香、父親に扇子、母親に紅白の真綿など）も持参した。結納を受けた方ではシンセキを呼んで披露し、ご馳走を振舞い、帰りには手土産を持ってもらった。以上は、一般的な農村部の結納の様子である。

婚約の証として金品を贈った以前は、双方で酒を酌み交わして婚約としていた。この酒は、肴とともに婿方が持参し、ここでは、婿方の飲食物をともに食べることに意義があった。現在の結納で、家内喜多留料と称して酒肴料を添えるのも、この名残りである。西三河地方では、トックリコロガシ（徳利転がし）といって、結納の際に婿方から持参した酒をすべて飲み干す習慣があるが、これは市域東南部にも分布している。緑区鳴海のある話者は、結納オサメにはオチュウニン夫婦と婿の父親が行き、この時には熨斗紙を巻いた一升瓶を持っていったという。酒は全部を飲んで瓶を転がし、飲めないときは飲んだことにした。名東区高針のある話者は、結納の時はオチュウニンと婿の父が嫁方を訪れ、徳利に入った酒、スルメなどの肴を持参した。結納が済むことを「徳利が転ぶ」といった。

町場での結納は、話者によって千差万別に語られている。碁盤割の本店同士の結納では、定型に従って最高級の品を揃えていた。結納品は番頭が二人くらいで半長持に入れて持参し、家族に対しての土産も、男の人には扇子、女の人には反物や真綿が用意された。土産は女中や店員などにも持参した。振袖などの荷物もたくさん揃え、嫁方では、

引出結納としてモーニングなどを返したという。一方、閑所の長屋に住む人たちなどは、結納金の包みだけを持参して済ますことが多かったようである。

結納は、嫁入りの荷物同様、これを近所に披露することも一部ではおこなわれた。熱田区大瀬子町の魚仲買商では、戦前、結納がもたらされた際、近所の人たちが結納飾りを見に来たので手土産を出してもてなしたという。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

2 結納から荷送りまで

嫁入り道具

婚礼に際してどのような荷物を持参するかということは、時代によっても階層によってもまちまちである。嫁入りの荷物はツリモノ(釣りもの)と呼ばれ、これは元々は、棹を差して運んだ箆笥や長持のことを意味した。五釣りであれば、箆笥三棹、長持(布団、座布団)二棹ということになる。これに対して、下駄箱などは付属品であり、ツリモノには数えなかった。琴も一釣りに数えるが、農村部では、琴を持ってきた人はまれであった。

ツリモノの数は、その婚礼のみならず、婚家と里方の家格を端的に示すことになり、互いの家の今後のツキアイ関係にも影響を与える。「釣り合わないのは不縁のもと」ということがやかましく語られ、背伸びをせずに、また貧弱でないツリモノの準備が必要であった。したがって、婿方嫁方双方の話し合いで数が決められた。普通は一〜三釣りの範囲であり、箆笥と長持一つずつの二釣りというところが多い。ツリモノが多くなる場合、数は奇数で合わせるものと言われ、五釣り、七釣り、九釣りと増えてゆく。市域西部でも、五〜七釣りの荷物を持参するところは、通常、オダイ衆とよばれる大地主の家に限られ、ムラの中に何軒もなかったという。反対に、箆笥を持参しないような場合はフロシキヨメイリ(風呂敷嫁入り)といわれるが、昭和初期ではかなりの無理をしても箆笥は用意したものといい、フロシキヨメイリはまれであった。かつてのこの地方の嫁入り道具は、平均的には豊かであったと言えるが、一部に喧伝されるような派手な事例は、元は限られたものであった。ただ、道具を披露するエリカザリの習慣があるところから、派手に流れてゆく要素があったと言える。

農村部の嫁入りで一般に持参された道具は、箆笥、長持、鏡台、下駄箱、茶箆笥、盥、ハンゾ(半挿)などである。戦後では、ミシンや自転車を持ってゆく人もあり、また、箆笥が洋服ダンスになったり長持が縦長持(布団箆笥)になったりする。

着物は、晴着(ヨソユキ) マチ着、普段着、仕事着、喪服など、嫁が一代着るものを持っていった。農家では、農作業をしなくてはならないので緋のものをたくさん持っていった。着物は普段のものは自分で仕立て、いいものは買う場合が多かった。紋付には在所の家紋を入れ、在所で用意したものであることを明らかにした。結婚が決まると、どこで聞きつけたのか、すぐに呉服屋さんが飛んできたものだったという。昭和初年頃は、跡取りの家に嫁ぐ場合は喪服も白と黒を持参した。これは、夫が喪主になれば、妻も白の喪服を着たためである。この頃は日本髪を結うことがあったので、かんざし、櫛、こうがいなどの結髪用具も必要であった。

布団は客用、普段用と二流れは持ってゆき、座布団も夏・冬用それぞれ一〇枚は揃えた。また、嫁は一生履くようにと、桐や畳のついた女物の下駄をたくさん持ってきたが、これを盥の大小の中に鼻緒に紐を通して丸くして山形に飾ることがあった。嫁が持ってきたものだけで足りないときは、お祝いに半襟や履き物をもらっているのだから、これらを足して飾り付けた。

町場の場合、嫁入り道具に見られる階層差は農村部よりも顕著である。碁盤割の本店の場合などは、ツリモノの数で一九釣りなどといって、トラックを何台も連ねての荷物運びがあった。しかし、下町の長屋に住む人たちは、持参する荷物といっても着るもののみで数も多くなかったのだから、「婚礼の二、三日前に親が持ってきた」という程度のことが多かった。

西区沢井町の警察官の家庭に生まれたある話者は、昭和一五年、サラリーマンの夫と結婚して中村区米野に新居を持った。当時の米野は農地を開き、二階建て長屋形式の借家がどんどん建てられた「新興住宅地」であり、新婚で住む人も多かった。この時は、新所帯を持つことになるので生活用品はすべて嫁の方で準備した。嫁入り道具は箆笥二棹、長持一棹の三釣りで、このほか、茶箆笥、鏡台、鍋釜、水屋、冷蔵庫(氷を入れるもの)、裁ち台、針箱、下駄箱、着物(夏冬、喪服、小袖など)、布団(夏冬)、蚊帳、茶碗、小物、盥(大小があり、大きなものは行水にも使い、小さなものは下着などを洗った)、洗濯板に至るまでを持っていった。これに対し、婿方では自分の着物を持ってくる程度であった。道具は知り合いの家具屋に注文し、嫁方に運んでもらって着物を詰めた。下駄箱にも高下駄、日和下駄などを詰め、傘も蛇の目、コウモリ二本ずつくらいを用意した。当時のサラリーマン核家族の所帯道具がうかがわれる。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

2 結納から荷送りまで

荷送り

嫁入りの荷物は、嫁方が途中まで運び、ここで婿方の者に引き渡す場合と、そのまま婿の家まで運び込む場合とがある。前者は市域北部に見られ、この場合、荷送りは婚礼当日の朝におこなわれる。市域南部や町場では後者が多く、荷送りは婚礼前日から一〇日前くらいにおこなった。いずれの場合も、オチュウニンが立ち会うことになる。オダイ衆であれば、揃いの法被や鉢巻を用意してオデイリ衆に運んでもらった。

守山区川村では、嫁入りの荷物は婚礼当日の朝に出した。運ぶのは嫁方のシンセキ五、六人で、こざっぱりした格好で来る。荷物は八八車二台くらいに載せ、箆笥や長持などは棹を差し、油単をかけて吊っていった。この時には青竹の杖を用いた。婿方では、やはりシンセキ五、六人で途中まで荷を受け取りに来る。場所は、ムラ内同士の婚礼であれば、辻天王のところ（シマの中心で天王様の小祠が祀られた場所）などが選ばれた。嫁方からは酒と肴を持参し、受け渡し場所で一杯飲む。荷物とともに、杖も引き渡した。嫁入りの荷物は婚家の縁から直接ザシキに上げ、ザシキとガイドコの北端に並べた。

西区比良や名東区高針の荷送りも同様であり、荷物の受け渡し場所としては、ムラの入口や坂の上、橋など、境となるところが選ばれていた。比良では、受け渡し場所に蓆を敷いて互いに冷や酒で酒盛りをし、通りがかりの人にも振舞ったという。

婿の家まで荷物を運び込む場合は、運んできた人たちを酒食でもてなすことになる。中川区下之一色では、荷物は婚礼前日の午前中に婿方に送った。この時は、嫁方のシンセキの男衆が手伝いに来た。箆笥や長持などは竹竿を通して吊り、青竹の息杖をついていった。他の荷物はリヤカーで運び、婿の家の中に並べた。婿方では兄弟衆が寄って受け取りをし、「お祝いが用意してあるで」といってお昼ご飯を出し、酒を飲んだ。この祝宴は三時くらいまで続き、荷物を持ってきた人には、帰りに折詰の料理と祝儀を出した。このため、「荷物を運ぶ人は何人来てもらえますか」といって事前に婿の方で確認していた。この宴は、婚礼の際に招かれないシンセキの新客（この場合、嫁方の客に対するもてなし）も兼ねていたため、荷物を運ぶのは若い人とは限らず、シンセキそれぞれの家の当主が運んだ。

港区西福田や緑区大高でも、荷物は婚礼の三日から一週間前に嫁方のシンセキが運び、嫁方で接待を受けた。水路の多かった西福田では、途中まで舟で運び、リヤカーや馬車に積み替えることもあった。

町場では、荷物を途中で受け渡す事例はあまりない。碁盤割の本店では、婚礼の三日くらい前、番頭が指図をし、近くの場合は出入の大工、左官、日傭方が紋入りの法被、桃色の鉢巻き姿で運んだ。遠方であれば、紅白の幕を掛けたトラックで運ぶことになる。中流の家の場合でも、家具店から送られた道具に着物などを詰めたあと、婚礼の二、三日前の日柄のよいときにトラックで運んだ。家具店や知り合いの人など、二、三人を手伝いに頼んだが、農村部のように婿方での酒宴がないため、この人たちには祝儀を出した。荷送りはオチュウニンが取り仕切り、先方では目録を渡した。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

2 結納から荷送りまで

嫁入り道具の披露

嫁入り道具を近所の人などに披露することをエリカザリ（襟飾り）とかエリゾロイ（襟揃い）、イショウミセ（衣装見せ）、イショウビラキ（衣装開き）などという。農村部では、エリカザリは、婚礼翌日、近隣の者に対する嫁披露（ボタモチヨビ・ヨメゲンゾなど）の中で実施される事例が多い。嫁披露の中でおこなわれる以外は、農村部のエリカザリはたくさんの道具を持たせる家に限られていた。これに対し、道具や衣装を荷送り前に嫁方で披露したり、荷送り直後に婿方で披露するのは、町場で盛んな習慣であると言える。

下之一色では、嫁方から荷送りをする一日前、リンカ（隣家）衆に「明日荷物が行くでちょっと見たってちょう」とサタ（沙汰）をして、嫁入り道具の披露をした。道具は座敷に並べ、着物などは外に出し、「こんだけ持たせるでね」といって見せた。見に来るのは女の人ばかりで、「これだけ仕度したで大変だったね」とねぎらってくれるので、お土産に嫁入りの時の菓子を持っていってもらった。婿方に荷物が届くと、婚礼二、三日前に披露することもあったが、婚礼翌日の嫁披露の中でイショウビラキをするため、荷物の披露が二度にわたって実施されることになった。緑区大高や有松でも、嫁入り道具が届くとシンセキや近所の濃いツキアイの女の人を招き、お茶とお菓子を出して荷物の披露をおこなう場合があった。しかし、これらはいずれも豊かな家に限っておこなわれるものであった。

町場でも、嫁方でのエリカザリは大きな家に限られていた。碁盤割の大店などでは道具の点検も兼ね、婚礼の二、三日から一週間くらい前にエリカザリをおこない、この時に目録を作成した。招く範囲は商家によって異なり、店の人の奥さんやシンセキ、出入衆に限った家や、近所まで招いたところなどまちまちである。たいていは女の人たちが来て、目録と照らし合わせて衣装などを見ていった。エリカザリをやる場合、饅頭などを土産に持たせ、負担が大きかったという。

一方、荷送り後の婿方でのエリカザリは、町場の中流以上の家庭では珍しい習慣ではなく、華美に流れる風潮があった。たいていは近所の奥さん連中が来るので、嫁入りの荷物を部屋に並べ、衣紋掛けに着物を飾り、見に来た人には「よう見てちょうだいた」といってお菓子を手渡した。「初めて嫁をもらったので珍しくてエリカザリをした」という話者もあり、嫁をもらう家にとっては楽しみでもあった。嫁入り道具は、本来は嫁の私財であるため、婚礼以前に勝手に婿方で披露をするのは許されない。しかし、町場では婚礼翌日以降に近隣の人を呼んで嫁披露をする習慣がないため、元々は嫁披露の一環としておこなわれていたエリカザリが、単に道具の披露へと転換しておこなわれたのであろう。農村部に比して町場の近隣関係は、互いに家に招きあって嫁を披露するほどには密接ではなく、手拭い一本を持って挨拶に行けば事足りるものであった。反面、それだけではその家の格を示すことができず、体面を重視する上流の町屋ではエリカザリが必要となった。町場の中流家庭でもエリカザリがおこなわれたのは、このような上流の町屋の習慣が影響したものであろう。一方で、より密接な近隣関係を持っていた下町長屋の住人は、エリカザリをするほどの荷物は持参せず、エリカザリは「よほどの金持ちがやること」と捉えられていた。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

3 婚礼当日

花嫁衣装

婚礼当日の朝、花嫁を出す家では苗字を染め抜いた青白の横縞の幕を玄関に張ったりした。花嫁は髪結さん（市域西部ではビジョウ（美粧）さんと称した）に髪を結ってもらい、花嫁衣装を着付けた。花嫁衣装は年代差、階層差が著しいが、昭和初期の農村部の場合は紋付きの黒留袖・裾模様が多かった。「打掛を着るのは宮様である」といい、オダイ衆であっても珍しかった。頭は島田に結び、角隠しをつけるのが普通で、一般には綿帽子などはなかった。自分の毛で島田に結ったため、婚礼の前は髪を伸ばし、癖を付けるために桃割れやイタコ島田に結ってならしておいた。戦前は、婚礼翌日の近隣への挨拶に島田で回る場合があり、婚礼の夜は、髪はそのままにして寝た。そのため、花嫁道具の中には木の高枕が入っていたが、慣れない高枕が苦痛であったという話者は多い。なお、髪結さんは婚家まで付き添い、花嫁の介添えをする場合もあった。

町場の普通の家でも、たいていは黒留袖・裾模様を準備した。振袖を着る人は「五釣り以上の荷物を用意する上流の人」とされ、「派手にやってやれ」という場合は振袖だった。また、打掛はよほどの人でなければ着なかったというが、碁盤割の本店などでは、白と色物の振袖と打掛を用意し、色直しの時に着替えをした。

一方、昭和初期には貸衣装もあり、この場合は、黒紋付・裾模様の振袖を着ることができたし、頭は島田のカツラに角隠しをつけて済ませることもあった。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

3 婚礼当日

新客・婿入り

婚礼当日の午前中、婿方から花婿、オチュウニン、婿方のシンセキなどが嫁方を訪れ、嫁方のシンセキと酒食をともにするのが新客・婿入りである。新客のしきたりは農村部では市内全域に見られ、西区比良ではイチゲン（一見）、港区西福田では迎え新客などと称している。この時、花婿が嫁方で嫁の両親と盃を交わしたりして親子関係を作るような儀礼は見られず、婿方の主要なシンセキが、嫁方のシンセキとの間に縁戚関係を確認するための儀礼という性格が強い。昼食をもてなされ、そのまま花嫁より先に婿方に戻ってくる場合がほとんどであるが、婿方の客の中で婿だけを残し、後に花嫁とともに婚家におもむくところもあった。

名東区高針では、婿入りといって、婚礼当日の朝、オチュウニン夫婦と花婿、その兄弟・シンセキなどが嫁方を訪れた。人数は事前に打ち合わせ、だいたい八人くらいであり、客は紋付、白足袋に新品の桐の下駄を履いていった。嫁方では朝からシンセキが来て宴を開いており、花嫁の親とシンセキで婿方の客をもてなした。婿入りには、シンセキの中でも年配者がついて行くものだが、時には、従兄弟などで婿と同じくらいの年格好の者が入ることもあり、これをムコカクシ（婿隠し）といった。婿方の客は、ご馳走をよばれて昼くらいには帰っていった。

守山区川村では、婚礼当日の昼くらいに、婿方から花婿、オチュウニン、婿方の濃いシンセキ五、六人が新客にやってきた。これはシンセキの顔見せであり、嫁方では膳を出してもてなし、帰りにラクガンで作った鯛などを土産に持って帰ってもらった。新客は三時くらいに帰り、「新客が帰るでそろそろ嫁が出る」と言って、嫁のデタチの菓子をもらおうと集まった子どもたちはそわそわした。

町場では、婿入りといえば花嫁を迎えに行く習慣のように解されている。婿方の客を嫁方でもてなすしきたりは早い時期になくなっていったようである。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

3 婚礼当日

嫁の出発から入家

婚礼のことは、一般にはシュウゲン（祝言）とよんだが、一方ではヨメイリ、ヨメリなどとも称し、花嫁の入家に重きが置かれていた。かつての婚礼は、日の暮れ時におこなうものであり、新客から戻ったオチュウニンは、しばらくしてから高張提灯に灯をともして花嫁を迎えに行った。婚礼開始の時刻が早くなってからでも、オチュウニンが提灯を持参して迎えに行くしきたりは続いていた場合が多い。

花嫁の出立に際しては様々なまじないがおこなわれるが、それは葬式の出棺時のまじないと類似している。花嫁が実家から出るときは玄関からでなく、ザシキの縁側から直接外に出るといふところが多いが、これも棺を出すときと同じである。

守山区、名東区などの市域東北部では、花嫁はオカッテに筵を敷いて座り、そこで両親と水盃を交わし、「お世話になりました」と挨拶をして家を出た。筵は北側に向けて二つ折りにしたもので、葬式の時、棺を安置するときと同じであった。これをキタハンジョウ（北半畳）という。花嫁は玄関から外に出たが、このときはキタハンジョウの筵を割木で叩いて追い出した。これも葬式の時と同じまじないであり、「死んだ人のように嫁いだ先の土になって元に戻るな。辛抱しろ」という意味であったとされる。このほか、嫁ぎ先から戻ってこないまじないとして、嫁入り当日の朝食後、それまで娘が使っていた茶碗と皿を、ドマに叩きつけて割ったところもある。実家を出るときには「後ろを振り向くな」ともいわれ、これも「暇をもらって出てくるといかに」ということだった。

花嫁が家を出る時と婿家に入る時、「嫁菓子」「嫁御の菓子」と称し、駄菓子を撒く習慣は市域全体で見られる。二階があれば二階から、なければ梯子を掛けて屋根に登り、嫁方のシンセキがばら撒いた。菓子の入った一斗缶が屋根の上にくいつ乗っているか撒く菓子の量が分かり、子どもが集まってきた。菓子はカメノイチなどと呼ばれた細長いもの、ゴマ入りの亀の子煎餅などで、わしづかみにしたり風呂敷に入れて撒き、この時には大声で「嫁入りヨー」と叫んだ。西区比良では、夕方の五時頃、オチュウニンが提灯を持って嫁方に花嫁を迎えに行き、花嫁が縁側から出ると「嫁入りヨー」と叫んで菓子を投げた。花嫁は少しの距離を花嫁衣装を着て道行きで歩き、それから人力車に乗った。かつての農村部では、タクシーに乗っての嫁入りは経済的に裕福な一部の階層に限られ、たいていは人力車を利用していた。道行きの行列の順序は、オチュウニン、花嫁、父親、嫁のシンセキの順で、嫁方のシンセキはイチゲンの客の数と合わせ、たいていは男の人が行った。婿方に着いて人力車を降りると、ここでも菓子を撒いた。

町場の長屋では、嫁菓子を撒くのは、ある程度余裕のある人であったといい、誰もがおこない得たしきたりではなかった。戦後は直接菓子を撒かず、袋入りのものを渡すようになってきている。「一斗缶が五本くらい」の嫁菓子が普通であった昔に比べ、現在では嫁菓子に費やす金額は何倍にもなり、派手になってきたことは確かである。

『名古屋市史 風俗編』は、元文四年（一七三九）の町触で、婚礼に際してのツブテ打ちが禁じられたことを記載している。これは、町内や隣町の者が集まり、婚礼のあった家に石を投げ、戸部を破り、あるいは輿入れの途中でツブテを打って妨害する習慣であり、これに対しては、子どもの仕業であっても、庄屋、町代、組頭、隣家のものが制止することとしている。儀礼的な妨害がエスカレートして、禁令が出されたものであろうが、この禁はたびたび出されていて、なかなか守られなかったようである。この種の妨害に対して祝儀や菓子を出す事例は各地にあり、嫁菓子の習慣もこのようなところから生まれた可能性がある。ツブテ打ちがいつからなくなったものかは定かではないが、昭和初期の事例では、嫁入り行列に対しての儀礼的な妨害については確認できなかった。現在では、嫁入りの途中をささぎることは厳禁とされ、嫁入り途中のタクシーが後戻りすることも縁起が悪いとされる。嫁入りのタクシーが狭い道で対向車と出会った場合、相手の車をバックさせるために、あらかじめ祝儀を用意したりもする。

婿家への入家の時もまじないがある。西区比良では、婿方に着いて人力車から降りた花嫁には藁草履を履かせた。婿家には縁側から入り、ここで脱いだ藁草履は、婿方のシ

ンセキが鼻緒を切って屋根に上げた。これは、家におさまるよというまじないで、碁盤割の大店の婚礼でもおこなわれた。

花嫁を迎える婿方では、シンセキが紋入りの高張提灯を掲げて出迎えに出るのが一般的であった。特に嫁入り前の娘など、女の人たちが着飾って並ぶ場合は「迎え女郎」とか「迎え女」「お待ち女郎」と称している。碁盤割の大店の婚礼では、お待ち女郎は小さな子ども二人であったりもした。

花嫁は、婚家の色に染まるため、入家の時は白無垢にしたというところも多い。黒留袖の下には白無垢を着ているので、婚家の近所の家を足休みに頼んで着替えた。また、入家後は真っ先に仏壇に参るが、その前に奥の間で白無垢に着替えたり、白のものを羽織ったりすることもあった。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

3 婚礼当日

町場の婚礼の場所

農村部では、昭和二〇年代までは家庭での婚礼がほとんどであったが、町場の場合、自宅が狭いなどの事情で家での婚礼が難しいことも多かった。昭和初期の段階では、「家の外に青白の幕を張り、嫁入り行列で来て家で結婚式をする人もいたが、これは大きな家の人の場合である」といい、中流の町屋では式場結婚式が一般的になっていた。いわゆる神前結婚式は、名古屋の場合、明治四〇年（一九〇七）に西新町（東区）の神宮奉斎会愛知本部で始まったとされる（『名古屋市史 風俗編』）。抜いのあと、神饌を供え、婿・嫁が座って祝詞をあげて三献の式および親戚の盃をおこなう、現在とほぼ同じスタイルで、式後、料理屋などに移動して披露宴をするのが普通であった。太平洋戦争以前、神前結婚式の場所としてよく利用されていたのは、縁結びの神とされる千早（千種区）の出雲大社分院であり、このほか、熱田神宮や那古野神社などでも挙式がおこなわれた。貸衣装なども神社指定の店で用意され、仕出しを取っての披露宴も可能であったため、便利な式場結婚式の数は増えていった。

しかし、町場でも、下町に住んだ一般の人々は、お金のかからない自宅での挙式であり、見に来た人に菓子を撒き、オチュウニンが向こう三軒両隣の組内を回って挨拶をする程度で、「こそこそとやってしまう」ことが多かったという。披露宴は自宅で仕出しを取ったり、料理屋、寿司屋などでおこなった。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

3 婚礼当日

盃ごと

婚姻成立の儀礼として夫婦の盃ごとが定着したのは、さほど古いことではないとされている。しかし、盃ごとが婚姻儀礼の核心部であると捉えられるようになって様式化が進み、地域的な差異はあまり見られなくなっている。

盃の受け渡しは、オチョウ（雄蝶）、メチョウ（雌蝶）といわれる男の子、女の子がおこなう場合が多い。五、六歳から小学校低学年くらいで、婿方のシンセキの子どもなどが頼まれた。それぞれが晴着を着て、男の子が三方に用意した三つ重ねの盃を受け渡し、女の子が酒器を持って酒を注いだ。場合によっては、二つの酒器で両側から注ぐこともあった。この酒器には水引や紅白の紙で作ったチョウチョの飾りがつけられ、元来はこれをオチョウ・メチョウと称していた。

盃ごとは座敷でおこなわれる場合がほとんどで、一般には正面に花婿・花嫁、その両側にオチュウニン、座敷奥側に嫁方の客、縁側に婿方の客が並んだ。それぞれの親は、客の座の上座につく場合が多い。図8 1は、西区比良の婚礼座順を示したものであり、市域での標準的な座順である。一方、花嫁のデタチの時、キタハンジョウで両親と水盃を交わす地域では、当然ながら、婚礼に花嫁の両親は参加しない。したがって、おじなどがシンセキ代表として加わって上座に座ることになる。守山区川村での婚礼の座順は図8 2のようであった。嫁方から婚礼に出席する客は、やはり新客とよばれる場合が多い。

盃ごとは、農村部の場合、一般には障子を開け放って公開され、嫁菓子を貰いに来た近所の人たちが様子を見ていった。盃を干すときに、唐紙の陰などで「オサカナコレニー」と叫んでスルメを摘みあげる役割の人がおり、早口で言ったり声色を変えたりして笑わせた。盃ごとは、これが楽しみで子どもも見に行ったという。ところによっては、この時のスルメは、片側から巻いて筒状にしたものと、両側から中に巻いて真中に溝を作るようにしたものの二つを用意した。いずれも縄で固く縛って形を作ったもので、性器を表している。このスルメをいくつにも切って三方にのせ、飲む前に「オサカナココニー」、飲んでから「トトココニー」といって青い割り箸で摘み、三方の向こう側に一切れずつ運んだ。緑区方面では、スルメの代わりに昆布が使われることもあったようである。

夫婦盃のあと、親子や兄弟の盃ごとをあらたまっておこなう場合は少なく、お流れとあって、一つの盃を宴の客に回して飲んで済ませた。この後、色替えとして、花嫁が訪問着のようなものに一枚替えてくることがあるので、近所の人たちはこの時まで様子を見ている。披露宴になると障子は閉めてしまい、外の見物人たちは帰って行った。

図8 1 図8 2

第八章 人の一生

第一節 婚礼

3 婚礼当日

披露宴

披露宴は深夜遅くまで、場合によっては夜明けまでやっていた。守山区川村では、宴の料理はシンセキ、兄弟などを手伝いに頼んで家で作り、招かれた家の女の人がオカッテに入って、男の人が宴の座に着いた。オカッテの指揮は器用な男の人がとり、この人は宴の席には座らず、最後に労をねぎらわれた。本膳は各家で持っていたが、足りない場合はシンセキから借りたりした。料理はお膳に尾頭付き、茶碗蒸し、お吸い物、赤飯、ご飯などをのせ、あとはどんぶりや大皿に椎茸、角麩、蒲鉾などの五つ盛り、七つ盛りを盛って順に回し、銘々でとった。川村は木遣り歌が盛んであったこともあり、宴の時には得意な人が伊勢木遣りなどを歌った。花嫁は気疲れするので途中からナンドに入り、女のオチュウニンの世話で色替えをして出てくる。宴は一二時前に終わり、最後にオチュウニンが挨拶をし、花嫁がお客にお茶を出してお開きとなった。なお、川村の婚礼では、花婿はシュウゲン（三三九度）の時にだけ列席し、披露宴の時はオカッテに行き酒の爛などをしていた。名東区高針でも、婚礼の時に花婿の席はあったが、早くカゲに入ってしまった、やることがないのでクドをつつついていたという。婚礼の宴は、本来は新嫁を披露するものであり、花婿はいなくてもよかったのである。

披露宴の際の料理は、昭和初期の市域の場合、農村部であっても仕出屋に頼んだ事例が目につく。仕出屋は婚家に来て調理をおこない、手伝いの女性は盛りつけや給仕をおこなった。高膳などを仕出屋が調達した場合も多い。引き物には、料理を詰めた折箱、赤飯、尺の鯛の落雁、鯉節などが出された。

前述した『名古屋市史 風俗編』所収・元文四年の町触では、婚礼の際、町内の若者がやってきて酒を飲み、振舞いを要求することがあり、費用もかさみ、風紀も乱れるところから、庄屋、町代、組頭、組合のものは、若者の親を通じてこういうことがないように取り締まるべきであるとしている。婚礼時の若い衆の訪問は、一部の地域では昭和初期でも残っていた。西区比良では、披露宴の時、「三年友だち」など同年の若い衆がハヤシコミ（囃し込み）に来た。この時はいかかわしい絵を描いてきたり、半紙に猥雑な文句を書いて笹に下げてきたり、性器の作りものを作ってくる。これは祝い的一种であり、ハヤシコミに来た友だち連中にはあらためて振舞いをした。港区西福田でも、披露宴の後、婿の友人が五～十人ほどヘヤマイ（部屋見舞い）に来た。この時は化粧紙などを持ってきて、そのうちの二人が夫婦の営みを実演し、紙はこうやって使うんだと言ってからかったりした。夜二時くらいまでわいわいやっていて、新嫁さんに一人一人酒を注がせ、新嫁の名を冷やかしながらどくどくと聞いたりした。盃も性行為を図案にしたものを使ったりして、最後には節目の盃として新嫁さんにこの盃で酒を飲ませた。この場には、女性のオチュウニンがついていて、「このくらいで堪忍してくれ」といってお開きとなった。手荒な祝いであるが、婚礼に若い衆が深く関与していた時代の名残りであろう。なお、結婚初夜にオチュウニンの奥さんが花嫁のところに化粧紙を持ってゆくこともあり、これをザシキマイ（座敷見舞い）と称した。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

3 婚礼当日

床入りの儀礼

婚礼の夜、床入りの前に夫婦で高盛りご飯を分けて食べる習慣は全市域で見られる。たとえば西区児玉町では、「嫁御の高盛り御膳」といって、婚礼の宴が終わってから、高膳にのせた山盛りのご飯をオチュウニンがナンドに運び、夫婦でこれを食べた。これが済んでから、花嫁はようやく黒留袖を脱ぐことができたという。この時食べるご飯をワケメシ（分け飯）といい、赤飯を用いるところもあった。ワケメシは、盃ごとの様式が定まる以前の、婚姻を成立させるための儀礼であると考えられている。名東区高針では、三三九度が終わった後、ナンドの陰で大盛によそった一膳飯を夫婦二人で分けて食べた。西区比良でも、披露宴の始まりに、ハシツケ（箸付け）といって山盛りご飯を新嫁が一口食べ、あとはこれを身内で分けて食べる習わしがあった。シンセキとの盃ごと同様、縁を結ぶための儀礼であったと考えられる。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

3 婚礼当日

アシイレ（足入れ）

婚礼には、本来は様々な形式があったと考えられるが、時代の移り変わりとともに一元化が進んできた。その中で、古い時代の形式の一部が残り、時には曲解されている場合がある。アシイレも、そのような事例の一つであろう。

この地方では、正式な婚礼を挙げる以前に、娘が若者のところで、あるいは若者が娘のところで泊まる習慣をアシイレと称している。アシイレについては、話者によって語られる内容がまちまちで、大別すると、婚約前に試験的に男女関係を持つものと、婚約後、婚礼までの間に夜を共にするものがある。前者は相手を試す意味であったといい、水が入って（悪い噂などが流れて）崩れてしまい、これだけで終わりになって結婚しないこともあった。貞操観念の強かった時代、娘にとっては不利な習慣であったが、昭和一〇年頃までは、結納前に娘が若者のところに来て一晩泊まる事例は割と見られたようである。後者は婚約の強化のためのもので、たとえば、結納後、式までの日が長かったり婿養子をとる場合、嫁と婿が盃を交わして一晩を共に過ごすことがあった。

漁村である中川区下之一色では、アシイレの形態にも特色がある。ここでは、結納後、若者が晩に娘のところに行き、食事をして泊まってくることをアシイレといった。この時に盃ごとなどはおこなわず、また、最初は仲人の家で一緒に泊まったという事例もある。かつての下之一色では、結納後、若者が娘の家に頻りに泊まりにゆくことは珍しくなく、若者の布団などは娘のほうで用意をしたという。若者が娘の家に通い、また、その回数も多かったことから、いわゆるカヨイ婚（一時的訪婚）と似たようなところがある。もっとも、若者は毎日泊まりに行くわけではなく、期間は長くても半年くらいだったという。

アシイレは、古風な婚礼の名残りという見方もできる。昭和一一年、港区南陽町から中川区榎津に嫁いだある話者は、アシイレを伴うカヨイヨメリ（通い嫁入り）で結婚した。「カヨイヨメリは貧乏人の結婚式であり、三三九度もない」といい、「夜サリ」に婿の家に嫁ぎ、三三九度もなしで翌日に嫁方、婿方で披露宴をするものであった。通常のヨメリはホンヨメリ（本嫁入り）といって区別される。花嫁のところには、夜遅くにオチュウニンと婿が迎えに来るので、花嫁は真夜中の零時を過ぎてから婚家に向かった。このような深夜の嫁入りを「ネズミの嫁入り」などと称すこともあった。花嫁行列もなく、この話者は、婿のこぐ自転車の後ろに乗っていったという。婿方では仏さんに参り、ご飯を茶碗に盛ってオチュウニンが半分にし、二人で食べるワリメシ（割り飯）をした。この後、二人は床についたが、ここで花嫁が一晩泊まることをアシイレと称した。翌日、花嫁は花婿とともに在所に戻る。ここには嫁方のシンセキが招かれているので挨拶をし、披露の宴を開いた。前夜、婚礼は済んでいるため、花嫁はお客で来ていることになり、仏壇の前に東向きで座った。次いで、花嫁は婿と一緒に婚家に戻り、ここで婿方のシンセキと披露宴をおこなった。この場では、オチュウニンと嫁の親が挨拶をして、一連の儀礼が終わることになった。この事例は、一風変わったものではあるが、決して「貧乏人の結婚式」などというものではなかった。花嫁が在所を出るときは、ビジョウさん（髪結い）に島田に結ってもらい、イチチョウ口（一張羅）を着たといい、また、一夜を過ごした婚家から在所に戻る時も、ビジョウさんをよんで黒留袖の裾模様に着替えている。嫁菓子も、在所に戻るために婚家から出た時と、在所に入る時に撒き、在所での披露では、訪問着への色替えもおこなっている。さらに婚礼五日後には、新婚旅行にも行ったという。結納は前年に取り交わし、結納金一〇〇円というのも平均以上である。しかし、嫁入り道具は婚礼の前後には持参せず、初子が生まれてから、カリアガリの子どもの荷と合わせて持ってきたといい、古い時代の婚礼を彷彿させる。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

4 婚礼後の儀礼と里帰り

嫁披露とヘヤミマイ（部屋見舞い）

婚姻儀礼には、婚家に嫁いだ女性が、新しい社会の中で生活してゆくために必要な人間関係を作る意味あいがある。市域北部から西南部にかけての地域では、婚礼翌日、隣近所の女衆を婚家に招待し、新嫁を披露して嫁仲間に入れてもらう儀礼がおこなわれる。大きく見れば、尾張地方西部に広がる習慣で、ところによってポタモチヨビ（ぼた餅よび）、トナリビロウ（隣披露）、ヨメゲンゾ（嫁見参）、チャブルマイ（茶振舞い）、ヨメヨビ（嫁よび）などと称している。近隣の者の中で、特に女客が招かれるのは、ムラの中での日常の交渉が、かつては同性の者同士でおこなわれるのが基本だったからであろう。したがって、婿をもらったときは、婚礼翌日には近隣の男の人が招かれ、婿の披露がおこなわれた。嫁披露は、娘が嫁いだときは、実家の親としてはやってもらいたいものであったといい、衣装や髪型も嫁入りの時のように調べ、在所の母親がヘヤミマイに来たついでに挨拶をすることもあった。この儀礼によって、新嫁が婚家にかかわる女衆たちと円滑な人間関係を作ることが望まれていたのである。

一方、嫁披露をおこなう地域では、嫁入り道具の披露であるエリカザリを、この時にあわせてすることが多かった。ツリモノの数によってその家の格が示されるため、嫁入り道具は分相応ということが常に求められたが、その披露は「あそこはよ一け持ってきた」という噂をよぶものであり、その充実度が新嫁のステータスの確立にもつながった。このため、娘の親にとってみれば、嫁入り道具に対して「平均よりも多少は多く」という意識が働くことになり、道具がだんだん派手になってゆくことにつながった。

西区比良では、婚礼翌日に隣近所の女の人をよんで御馳走を振舞い、これをポタモチヨビとよんでいた。堅いところではイトコなどのシンセキもよんだ。一軒の家に二人の女の人がいれば、姑の方をよび、招かれた人は、全員でまとめてご祝儀を包んでくるかお祝いのもを持ってきた。ポタモチヨビは喜びを共にするということであり、普通より少し大きなポタモチ（餡と黄粉）を作ってキリダメに入れ、これを皿に盛って出した。このほか、本膳を組んでお酒も出した。上座には近所の年輩の女性が座り、一同に対して新嫁が挨拶をした。この時は、嫁入り道具も披露し、箆笥の中の着物なども引き出しを開けて見せた。児玉町では、婚礼翌日の朝から、姑の知り合いの女の人たちが三、四人来てポタモチを作った。お客は近所の女の人七、八人で、上座にはオチュウニンさんの奥さんが座った。嫁は島田のままでヨソユキを着て、下座から「これからお世話になります」といって挨拶をした。この儀礼は大げさなことではなく、お茶とポタモチが出るだけであったという。

守山区川村では、花嫁がカヨウ（里帰り）に行っているときに近所、トナリ、シマの女の人たち総勢二〇人くらいが集まり、ポタモチを作った。これをシリスエポタモチ（尻据えぼた餅）とよんだ。女の人たちは目録にある嫁入り道具を見学し、箆笥を開けて着物、羽織、下着などがどれだけあるかを見て回った。女の人たちはザシキに座ってもらい、ポタモチと味噌汁、漬物の膳を出した。カヨウから戻った新嫁は着物を着替え、ダイドコで女衆に嫁入りの挨拶をし、お茶を出した。花嫁は頭ばかり下げていて大変であったという。

名東区引山でも、婚礼翌日に近所の年輩の女性を招き、新嫁が挨拶をした。この時まで、髪は島田のままにしておかなくてはならず、お客にはオハギを出してもてなした。

中川区榎津では、婚礼翌日、ヨロコビ・トナリビロウと称してトナリの女性を招いた。座順は、トナリの人同士で上座を譲り合うので、結局は年齢順になってしまう。この時には、大きなポタモチを作り、ご馳走と一緒に出した。新嫁はビジョウさんに髪を作ってもらって下座に控え、シュウトが「〇〇でございます。どうぞよろしくお願ひします」と挨拶をするので、お辞儀をした。戸田でも、婚礼の翌日、トナリの女衆をよんで花嫁の披露をし、ヨメヒロウ・ヨメゲンゾと称していた。この時は仕出屋からご馳走をとって振舞い、招かれたほうは、座布団の下にそっとお金を置いておいた。下之一色では、ヨロコビといい、婚礼の翌日、婿の家にトナリ組の人たちに来てもらって嫁の披露をし、新嫁さんはいい着物を着て挨拶をした。この時は、客に対してポタモチを振舞った。大

当郎では、婚礼翌日、トナリ組の主婦が婿の家に招かれ、新嫁さんと顔合わせをすることをヨメビロウといった。お昼が振舞われ、これがトナリづきあいの始めとなった。戦後はヨメビロウはなくなったため、風呂敷くらいを持って、姑が近所に新嫁さんを連れて挨拶に行くようになっている。

港区西福田では、チャブルマイ、ヨメヨビといって、婚礼の翌日、隣近所のツキアイのある奥さん連中を招き、新嫁の披露をした。昼の一時くらいから始まり、ちょっとした折詰とオコワを用意した。この時に、「名前は〇〇です。これからよろしくお願ひします」といって嫁を紹介した。「昔よばれたのでお茶いっぱいやってもらわんと」ということで、ヨメヨビは現在でもやる家がある。ヨメヨビをしないときは、「結婚披露」としてムラにお金を出している。

女衆への嫁披露は、町場でも裕福な家ではおこなわれていた。熱田区大瀬子町の魚仲買商では、昭和一三年の婚礼の際、婚礼翌日に女性ばかり二〇人くらいを招き、酒と料理を出して振舞った。これは、前日に招待した男客の奥さんなどであり、オチュウニンの奥さんが正座に着いた。嫁の在所からはヘヤマイとして、「いいふうにおさまったか」という意味で母親が様子を見に来た。お嫁さんは盛装でお客に挨拶をし、琴を弾いて披露したりした。この時、嫁入り道具の引き出しを開け、衣装などを見せた。

ヘヤマイは、婚礼翌日、在所の母親が婚家を訪問するもので、嫁披露の最中に来る場合もある。海部郡大治町から中川区榎津へ嫁いで来たある話者によれば、婚礼の翌日、在所の母親が大ピツに二杯（一荷）のオコワイ（赤飯）を蒸かして持ってきた。母親は、「夜、寝ずに蒸かした」といい、重箱に詰め、重カケをしてトナリ中に配った。西区児玉町でも、婚礼翌日のボタモチが済んだ頃、一〇時半から一時くらいに在所のお母さんとオチュウニンが手土産を持ってヘヤマイに来たという。

いずれにしても、ボタモチヨビは新嫁の婿方女衆への加入式であり、ここでは、娘の評価を高めるため、嫁入り道具を派手にしたいという気持ちが在所に働くことになった。町場では、女衆への披露の儀礼を欠き、荷物披露の習慣のみがおこなわれる例が多いが、これは都会的な儀礼への変化の結果であろう。婚礼道具が派手になり、名古屋の結婚式が派手であると喧伝されるようになった一つの背景として、女衆への披露の習慣があったと言え、そのような披露を必要とした社会観念の存在が指摘されよう。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

4 婚礼後の儀礼と里帰り

近隣・ムラへの披露

隣近所の人を婚家に招待しないまでも、新嫁が姑などに連れられ、婚家の近所を挨拶して回る習慣は全市域で見られる。これを近所マワリ、近所アルキ、トナリマワリ、トナリアルキなどという。婚礼翌日におこなわれる場合が多いが、ところによっては婚礼当日、あるいは婚礼三日目という事例もある。ナビロメ（名披露目）として婿と嫁の名を記した風呂敷を持って行き、この時は、髪結さんが来て丸髷に結び、ヨソユキを着てゆくところもあった。

町場でも、近隣とのツキアイは大切であり、婚礼の次の日、新嫁が姑に付き添われ、嫁方で用意した風呂敷を隣組や向こう三軒両隣くらいに配ったところが多い。

ムラへの披露としては、「結婚披露」の名目でムラにお金を出し、掲示板などで知らせる地域もあるが、市域全体としてはやらないところの方が多い。

かつては、ムラの人たちが仕事着以外の新嫁を見るのは、お祭りなどの機会に限られ、こういう時が披露の時でもあった。緑区氷上姉子神社では、旧暦二月のダイダイさんの祭り（太々神楽）の時、新嫁が髪を丸髷に結び、着飾ってお参りに行ったため、「新嫁御の衣装比べ」と称され、ムラの人々の楽しみになっていた。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

4 婚礼後の儀礼と里帰り

里帰り

里帰りには、婚礼直後におこなうものと、正月や盆などに定期的に帰るもの、初子の出産に際して帰るものがある。このうち、婚礼直後の里帰りは、カヨイ、カヨウ、新客などともよばれ、新嫁が在所に泊まってくる場合と、その日のうちに帰る場合がある。

日帰りのカヨウ、新客は、婚礼翌日におこなわれ、里帰りといっても儀礼的な色彩が強く、また日をあらためて泊まりに帰ることになる。守山区川村では、婚礼の翌日、嫁は角隠しを取り、島田に結った姿に色替えの着物を着て、姑に連れられて在所に挨拶に行き、これをカヨウといった。カヨウは無事にすみましてという挨拶である。この日、婚家では近所の女衆を招いているので、在所ではお茶をご馳走になるだけで午前中に帰ってきた。里帰りは一週間後にあらためて姑が送って行き、嫁は在所で一晩遊ばせてもらった。名東区高針では、婚礼の翌日、新嫁は花嫁衣装をつけて在所に戻り、これをカヨイ、新客と称した。このときは「嫁さんが里帰りだ」といい、オチュウニン、花婿、婿の姉妹なども紋付を着て、手土産を持って一緒に行った。新客は女性が多かった。嫁の在所ではお昼をご馳走になり、花嫁も在所に泊まることはなく、そのまま帰り、午後は婚家の近所にトナリマワリに行った。これとは別に、宿泊を伴う里帰りは婚礼後一週間くらいしてからおこない、帰りは母親に送られて来た。

緑区方面では、カヨウで在所に帰って泊まり、その近所に結婚の披露をする事例がある。大高では、婚礼の翌日、朝早くに姑さんに連れられ、新嫁は在所に帰った。これをカヨウといい、衣装をきちんとつけ土産を持参した。また、在所の近所に対し、一軒ずつ結婚の挨拶をおこなった。新嫁はこの日、一晩在所に泊まり、翌日、親に付き添われて婿方に戻った。有松では、式後、二、三日して婿を嫁方で招待することをカヨウといい、オチュウニンと一緒に婿と嫁が在所に行った。この時は風呂敷などを持参し、在所の近所に配ってもらった。この日、新嫁は一晩泊まり、翌日、在所の母に送られて婚家に戻った。

市域西部では、同じカヨウの呼び方をしても、その内容は純然たる里帰りとなっている。西区比良では、結婚後、三日くらい経って落ちついてから、姑が新嫁を在所に連れて行くことをカヨウといった。この時、婿はついて来ず、嫁は一、二日泊まってきた。婚家に戻るときは、活きた鯉や鯛をつけて在所の母親が送ってきた。中川区下之一色では、嫁いってから二、三日後に里帰りをした。ゆっくりの人は一週間後ということもあった。里帰りは嫁方から「何日までに来てください」と言うので、仲人が迎えに来て連れていった。この時は婿は同行しないが、里帰りをしている間、嫁方に何度か遊びに行く。里帰りは二、三日から長い場合で一週間くらいで、婿方に戻る時は仲人が連れてきて、「確かに送り届けました」と挨拶した。西区児玉町・沢井町、熱田区旗屋町などでも、婚礼三日後くらいに里帰りをして、新嫁が一晩から三晩くらい泊まってきたが、この時は、頭を丸髷に結い、留袖を着て里帰りをしたという。

定期的な里帰りの機会は、正月、盆、節供、祭りなどの時である。しかし、家によっては帰れない場合もあり、「嫁を帰すと姑が自分でオカッテをしなければいけないため、在所に帰してもらえなかった」「昔は、里帰りに行くときは姑にお願いして出かけたものであるが、それでも姑が『在所に行かしたげな』と近所に触れることもあったので、嫁としては行きづらかった」という話者は多い。このような中で、出産のための里帰りと、その後の産育儀礼にかかわる様々な在所との交渉は、嫁にとっての精神的な支えになっていたと言える。

里帰りに際し、婚家では在所に対して土産を用意した。たとえば、正月に帰るときは、歳暮として婿方で餅をついてお鏡さんにし、三方に載せて持たせた。また、里帰りに際し、婚家が新嫁に着物を作ってやることもあった。嫁入り後、最初の盆の里帰りには、シュウトさんが紺や縮の浴衣のような、夏にちょっとヨソユキに着的着物を作ってくれ、ボンハダギ(盆肌着)とよんだ。新嫁にとっては、「まじめにやっていたので気に入ってもらったか」と思われ、作ってもらったときはうれしかったものであるという。在所の親もこれを着て帰ると大変喜んだ。また、五月の節供の時は、新嫁はショウブハダギ(菖蒲肌着)を作ってもらった。

第八章 人の一生

第一節 婚礼

4 婚礼後の儀礼と里帰り

新婚旅行

新婚旅行が一般的になるのは、昭和三〇年代に入ってからである。しかし、特に町場では、戦前から新婚旅行に出かける人があった。多かったのは伊勢参りであるが、婚礼直後に出かけることは少なく、一カ月以上経ってから行ったという事例が目につく。

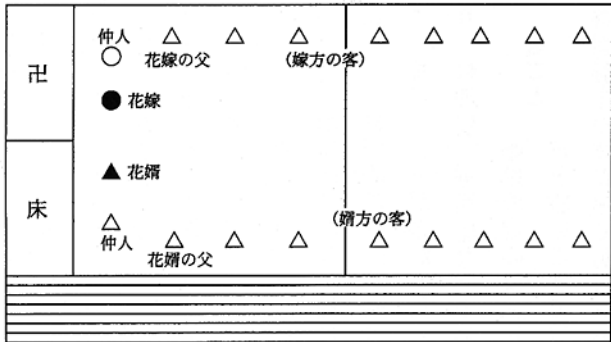


図 8 - 1 婚礼座順 (西区比良)

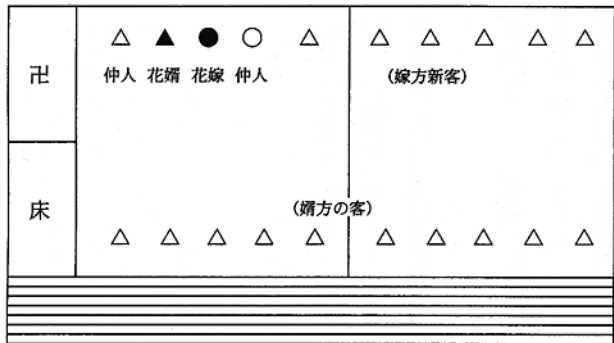


図 8 - 2 婚礼座順 (守山区川村)

表8-1 初の子に対する在所の負担

時 期	儀 礼	在所で準備するもの
妊娠	妊娠の挨拶（ハラミマイなど）	手土産
妊娠5カ月	帯祝い	腹帯・オコワ・餅（ハライタ餅）
出産	産の場所の提供	産着・オシメなど
産後3日目	イゾメ	餅（イゾメ餅）
産後7日目	七夜	膳（オコワ・尾頭付きなど）
産後約1カ月	宮参り	一つ身初着（紋付・羽二重など）
嫁ぎ先へ戻る時	カリアガリ	子供の荷一式（子供筆筒、乳母車、布団、衣類など）
産後約100日	ハシゾロエ	子供の膳椀
初めての節供	初節供	雛人形・鯉のぼりなど
初めての正月	初正月	羽子板・破魔矢
1歳の誕生	初誕生	靴・下駄
3・5・7歳	七五三	晴着
盆・暮れ	中元・歳暮	下駄・麻裏